「深江の浜と松原を守る！」

― 深江校区まちづくり事業の活動 ―

一人ひとりの考えは違う。予想図も違う。それでも・・・

めざすところは、一緒だった。

現在の深江の浜と松原は荒れ果てて目も当てられない。同会に所属するメンバーは、みな口を揃えて言う。

かつて深江の浜には、たくさんの魚介類が棲んでおり、多くの海水浴客でにぎわっていたそうだが、今では外国からの漂着物や犬のフンなどで昔の面影はない。

松林に足を踏み入れると雑草が生い茂り、ごみも散乱。昔はよく採れていたという松露（食用のキノコ）は見当たらない。

委員長の椎葉さんの記憶によれば、子どものころは松が小さく、砂丘地だったという。そのため、近くの民家や中学校には砂が吹き込み、廊下に砂が積もっていたそうだ。松が大きくなってからは、砂嵐がうそのようになくなり、近隣住民は本当に救われた。当時の人たちはみな、その時のありがたみが胸に焼き付いているという。

参考資料：上の『藤崎文書』によれば昔は松原が広がっていたことがうかがえる。右は現在の松原の様子。草木が生い茂り、足を踏み入れることもできない

会議といえば、みなさんは堅いイメージを思い浮かべるかもしれない。しかし、実際に参加してみると、みんなの笑い声が飛び交う明るく楽しい会議だった。

イベント参加者には、目いっぱい楽しんでもらいたいという気持ちから、受付時のシミュレーションや飲み物の受け渡し方法など、細部にわたり熱い意見交換が行われていた。

笑顔の絶えない話し合い
会議は3時間を超えることも・・・

『深江の自然と環境を守る会』の会議の様子

「深江の自然と環境を守る会」発足からの流れ

- **4月**（1回目の会議）委員長などの役員を決める 取り組み内容を話し合う
- **5月**（2回目の会議）計画の参考にするため、姉子の浜、深江の浜を視察
- **6月**（3・4回目の会議）・姉子の浜での取り組み内容を詳しく知るために公民館で勉強会 ・防風林の現況や松枯れについて勉強会
- **7月**（5回目の会議）これまで勉強してきたことを整理し、計画の青写真を作成
- **8月**（6回目の会議）・計画の実行に向けて具体的な役割分担などを決定 ・ボランティアの募集を開始
- **9月**（7回目の会議）・計画もいよいよ大詰め。内容を詰めるための話し合い ・小中学校へ標語の募集
- **10月**（8回目の会議）計画の最終確認を行う

手描きの地図だから温かみが感じられ、やさしく伝わると思う。

深江の自然と環境を守る会
実行委員
イベント部長
中川　慶典（なかがわ よしのり）さん

現役だったころは産業機械の設計を担当していたという中川さん。

CADという設計専用のコンピュータやコピー機が並んでいる部屋で描き上げられたイベント会場の地図は、意外にも手描きだった。

寸分の狂いも許されない設計の世界で生きてきた中川さんが手描きにこだわった理由は2つ。目印になるポイントだけを地図に落とし込むことができること。そして歪（ゆが）みのある線から温かみを感じることができることだという。

10月23日に行われた「深江浜をきれいにしよう」決起大会（イベント）のお知らせチラシ

表　裏

中川さんが制作した手描きのマップ

20年以上描きつづけた絵をまちづくりに生かせることは、大きな喜びです。

深江の浜の近くにある農業体験交流広場に行くと大きな看板が立っており、深江の浜から西を望んだ絶景が描かれている。

これらを描いたのは、自己流で20年近く絵を描き続けているメンバーの古川さん。糸島を中心にいろいろな場所で描いたスケッチは500枚を超える。

まず鉛筆で下絵を描き、水彩絵の具で薄く色を塗り広げる。紙の白地を残しながら色を付けるのがポイントで、どこまで色を付けるかの攻め際が難しさでもあり、楽しさでもあるそうだ。

地元で生まれ育った古川さんは深江の自然が大好きで、この深江の浜と松原を次世代へとつないでいくためにも絵を描いて看板にしたそうだ。

深江の自然と環境を守る会
実行委員
看板制作担当
古川　廣和（ふるかわ ひろかず）さん